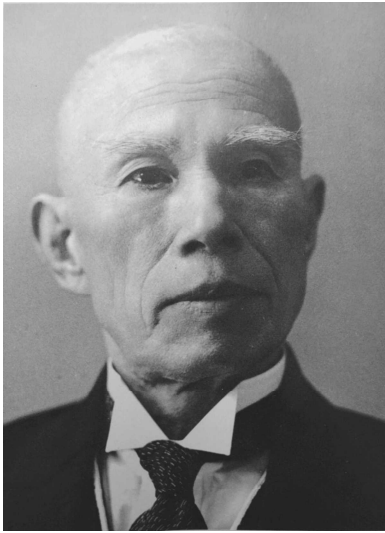


えん どう さい じ ろう

遠藤 斉治郎

仕事熱心で旺盛な研究心

— 替刃剃刀の新時代を築く —



遠藤 斉治郎 (1888 ~ 1958)
出典：『剃刀一代』1968

■ 生い立ち、20歳で独立してナイフ製造を始める

遠藤 斉治郎 (初代) は、1888 (明治21) 年、岐阜県加茂郡田原村 (現関市西田原) で五男として生まれた。遠藤は、小学校を卒業すると、兄が独立して始めていた関のポケットナイフ工場に徒弟として働き始めた。

ナイフ工場の8年間の修行を経て、20歳で独立すると、兼松ひろと結婚し、1908 (明治41) 年、田原の実家に戻って、小さなポケットナイフ工場を始めた。

当時のナイフ製造はすべて手作業であったが、遠藤はアイデアを活かして作業工程を工夫しナイフの品質向上と量産に努めた。

創業から10年後の1918年、遠藤は、父親の多額の借金はきれいに返済し、1万円を蓄えた。その年に京城 (現ソウル) の兄から有望事業 (酸素溶接) の話があり、蓄えた預金を持参して京城に渡ったが、同年、兄と始めた酸素溶接の事業は失敗に終わり、帰国した。最初の大きな挫折であった。

■ 510番ナイフで再起

京城から戻った遠藤は、関市富本町でポケットナイフの工場を再開、1920 (大正9) 年に合



当時の安全かみそり替え刃工場

出典：『剃刀一代』1968

資会社遠藤刃物製作所を設立した。

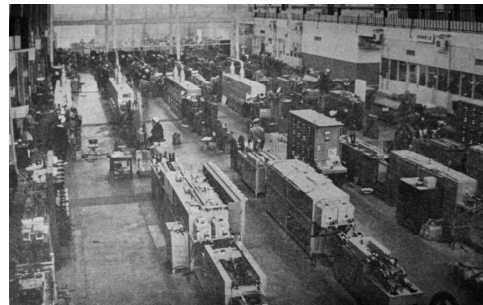
遠藤はこれまでの単純なナイフには満足せず、生産工程を機械化し、品質向上と量産化に努めた。量産化のために焼玉式エンジンや手回しプレス機などを考案し、遠藤刃物製作所を業界屈指のポケットナイフメーカーに育て上げた。

製品の中でも黒一色の素朴なナイフ「510番ナイフ」は、世界的な銘柄となった。「遠藤のナイフは売れる」、と数多くの模造品が手回った。1931 (昭和) 年、満州事変が勃発、昭和初頭の日本は不景気の嵐が吹き荒れ、ナイフの売れ行きは右肩下がりとなった。

■ 安全かみそり替え刃の国産化

ナイフの需要が激減する中、遠藤は、ポケットナイフに代わる次の商品を探していた時、東京で安全かみそりの替え刃がよく売れるとの話を耳にした。昭和のはじめ、安全かみそりの替え刃は、ほとんどが欧米からの輸入品であった。

遠藤は、関打刃物同業組合の面々にかみそり替え刃の開発を提案したが誰も同意しなかった。遠藤は、「これを国産化しなければ国の大きな損失」であると、独自にかみそり替え刃の国産化に着手した。上京して商工省の役人に国産替え刃の必要性を訴え、替え刃工場の見学を紹介されて、そこで替え刃生産の技術や問題点を学んだ。その頃、尼崎でドイツ人経営の替え刃工場が倒産したことを知り、大阪で刃物問屋を営んでいた小坂利雄 (関市出身) と提携して、その設備を購入し、1932年、関安全^{かみそり}剃刀製造 (後のフェザー安全剃刀) を創立した。



フェザー安全剃刀工場の替え刃生産ライン

出典：『剃刀一代』1968



空から見た昭和40年代のフェザー安全剃刀工場

出典：『剃刀一代』1968

戦後、本格的な製造が再開されると、遠藤の信念が実を結び、かみそり替え刃の生産は、飛躍的に発展した。プレス打ち抜き、刃付け、焼き入れなどを一貫作業とし、自動包装などの工程の自動化を図った。輸入品の半値で売り出された新製品は、瞬間に市場を席巻し、全国生産の85%を占めるに至った。

遠藤は、本業の刃物生産以外にも、関市の商工会議所会頭、市議会議長などを務め、精力的に関市の産業育成に取り組み、1958年には、国産替え刃の発展に尽くした功により、黄綬褒章を受章している。

(石田正治)